

サ
ン
プ
ル

「――陸、だろ？　ずっと、探してたんだ」

背後から掛けられた、どこか甘く、けれど酷く冷ややかな声に、俺はジッポライターのフタをカチリと閉めた。

ガソリンスタンドの徹夜シフトを終えたばかりの、夜明け前。油臭い作業着の胸ポケットから揉みくちやの煙草を引っ張り出し、ようやく火をつけようとしていたところだった。繁華街の外れ、薄暗い路地裏。湿り気を含んだ夜風が、疲れ切った首筋を撫でていく。

煙草を啜えたまま振り向くと、そこに一人の男が立っていた。

街灯のぼやけた光の中に佇むその姿に、思わず目を細める。

シワひとつない、高級ブランドの漆黒のスーツ。整えられた黒髪に、陶器のように白い肌。眉一つ乱さない整った顔には、洗練されているながら、どこか現実味のない笑みが浮かんでいた。俺が普段身を置いているガソリンスタンドや、昔から住み続けている地元の泥くさい街では逆立ちしても見かけない、いかにも「上流階級」といったハイソな匂いのする男だ。細身長身だが、その存在感は圧倒的で、身長一八五センチの俺と対峙しても、微塵も引けを取らない。

「……あ？ 誰だてめえ」

啞え煙草の脇から、低く濁った声を吐き出す。

俺の名前に「くん」なんて甘っちょろい敬称こそつけていないが、この男に見覚えは一秒たりとも浮かばない。

「俺の名前を軽々しく呼ぶ奴に、心当たりはねえんだけど。宗教の勧誘なら他を当たれ」

眉間に深くシワを寄せ、アッシュブラウンの無造作な髪を掻き上げ、昔叩き込まれた目力で威圧するように睨みつける。

作業着の上からでも分かる、鍛え上げられた筋肉質の体躯。首元から見え隠れする大型タトゥーと、耳に複数開けられたピアス。普通の奴なら、この「元総長」の風格に気圧されて一歩引くか、面倒を起こしたくなくて目を逸らすはずだ。

だが、目の前の黒スーツ男は、微動だにしなかった。

それどころか、細められた赤紫色の瞳の奥に、ぞっとするほど濃く熱い何かが揺らめく。

まるで、喉が渴ききった人間が冷えた水を目の前に突きつけられたかのような、あるいは執念深いコレクターが長年探し求めた品を手に入れたかのような——ねっとりと気味の悪い、狂気すら孕んだ愛おしそうな視線。

その視線が全身に絡みつき、肌が粟立った。

「初対面みたいな顔をされるのは悲しいな。……でも、今の君も相変わらず格好いい。その鋭い目つきも、全然変わっていない。あの時、僕を助けてくれた、その目……」

男は、俺が思い出せないことに落胆するどころか、むしろ睨まれることさえ楽しむように微笑んだ。

「……あア？ お前、マジで何言ってるんだ」

気味が悪いどころの話じゃない。この男を、昔の俺が助けた？ そんな記憶はねえ。関わっちゃいけない奴だと直感が警鐘を鳴らし、俺は舌打ちをして背を向けようとした。

「待ってくれ、陸。……冗談で声をかけたわけじゃないんだ」

男は一步、ずっと距離を詰めてきた。

一瞬だけ漂ったのは、上質なトワレの香りと、どこか冷ややかな大人の匂い。

「君の暴走族時代の弟分だった『タカシ』の件で話がある」

その口から飛び出した名前に、俺の足がピタリと止まった。

タカシ。

俺が元総長として頭を張っていた暴走族『黒蛇』で、一番俺の後ろをチヨロチヨロとついまわっていた下級生だ。俺がチームを解散して足を洗うと言った時、半泣きになりながら「陸さんの後を追って、俺も真面目に生きます」と頭を下げてきた、馬鹿がつくほど真っ直ぐな弟分。

「……タカシが、どうした」

振り向き直し、男の胸元を鋭く見つめる。

「あいつは今、真面目にバイトして大人しく生きてるはずだ。なんでてめえみたいな奴が、タカシの名前を知ってんだよ」

「あいつ、今かなりマズい連中に目をつけられていてね」

男は眉をハの字に落とし、心底心配そうなしぐさで言葉を継いだ。その演技には隙がなく、完璧な「親身な第三者」を装っている。

だが、その赤紫色の瞳は、依然として俺を捉えて離さない。

「僕の勤めている会社がね、そういった夜の街のトラブルや反社会的な揉め事を表に出さずに処理する部署を持っていたね。たまたま街で君を見かけて……元総長である君なら、あいつを救う手助けができるんじゃないかと思って声をかけたんだ。あの時のように……僕を助けてくれた時のように」

「……」

頭の中で不信感が渦を巻く。

怪しい。どう考えても怪しい。なんでそんな都合よく俺を見つける？　なんで一般のスーツ男がそこまで詳しい？　そして昔、俺が助けた？

必死に記憶を探ったが、目の前の洗練された男に結びつく過去など、どうしても思い出せない。

だが――もし、本当にタカシが俺の知らねえところでヤバい連中に引つかかっているとしたら。

足を洗わせたのは俺だ。元総長として、あいつが道を踏み外しそうになっているなら、殴つてでも引き戻すのが俺の責任^{ケジメ}だ。仲間を見捨てるような真似だけは、死んでもできねえ。

俺が義理固く、仲間の窮地には人一倍弱いという性分を、この男は完璧に理解しているかのように突いてきている。

「……ここでは立ち話もなんだ。僕の部屋がすぐ近くだから、そこで詳しく話さないか？　タカシ君の現状をまとめた資料もある」

「……」

男は優しく微笑み、すつと手招きをするように体を引いた。

その仕草は洗練されていたが、畏へ誘う蛇のような薄気味悪さがあった。

俺は啞えていた煙草を地面に落とし、靴の先で乱暴に踏み潰した。灰が夜の街に散っていく。

「……話ただけだぞ。もしタカシの名前を使っただらねえ嘘だったら、その綺麗な顔、二度と外を歩けないようにしてやるからな」

「ああ、約束するよ。……そういえば、まだ名乗っていなかったね。僕は橘侑真^{たちばな ゆうま}だ。侑真と呼んでくれ。ついてきて、陸」

男の背中に続いて歩き出しながら、俺は胸の奥で燦る小さな違和感を拭ぐい去れずにいた。偶然にしては、何もかもが出来すぎている。

俺の前に現れたタイミングも、「部屋がすぐ近くにある」という話も、まるで最初から俺を誘い込むために用意されていたみたいだ。

そもそも、助けた覚えすらない俺を、なぜこいつは「ずっと探していた」などと言ったのか。

この一步が、それまでの俺の日常を終わらせるとも知らずに。

かつて助けたはずの「陰キャスーツ男」に自由も居場所も奪われ、二度と抜け出せない愛情の泥沼へ連れ去られ、朝まで絶頂させられることになるなど——この時の俺は、まだ知る由もなかった。

連れ込まれたのは、見上げるのも首が痛くなるような高級タワーマンションの最上階だった。

エレベーターを降り、重厚な扉を開け放った先に広がっていたのは、俺の四畳半のボロアパートが何個収まるかも分からないほど広大なりビングだった。足元には毛足の長いラグ、全面ガラス張りの窓からは街の夜景が一望できる。

「……それで、タカシの資料はどこに——」

足を踏み入れた瞬間、背後で嫌な金属音が連続して響いた。

カチャリ、カチャリ。

続いて、ジャラリと重厚なチェーンが固定される音。

ハツとして振り返ると、侑真が入口の扉の鍵を二重に閉め、チェーンまでしっかりとかけているところだった。

それだけじゃない。奴は高級な黒スーツのポケットから手のひらサイズの黒い小型端末を取り出すと、サイドのスイッチを静かに押し込んだ。

小さな赤色のLEDランプが、暗闇の中で妖しく点灯する。

「……おい、何してんだよ。なんで鍵なんて閉めてんだ。それに……その不気味な機械は何だ」

返事の代わりに、作業着の胸ポケットの中で俺のスマホが短くブルツと震え、画面のアンテナ表示が一気に『圏外』へと書き換わった。

「電波遮断機^{ジャマー}だよ。これを起動している間、君のスマホから外部へは一切繋がらない。警察はもちろん、職場のガソリンスタンドにもね」

「……は？」

わけが分からず硬直する俺に、侑真はゆっくりと歩み寄ってきた。

さっきまでまどっていたビジネスマン風の柔らかな空気は、跡形もなく消え去っている。整った顔の中で赤紫色の瞳だけが光を失い、深海の底のように暗い情念をたたえていた。

「タカシ君の話は全部嘘だ。あいつがトラブルに巻き込まれているなんて事実はない。今頃はいつもの居酒屋で元気にバイトしているよ」

「てめえ……！ 俺を騙したのか！」

頭のテッペンに血が上った。

弟分の不祥事だと信じ込み、警戒を緩めた自分への苛立ちと、まんまと罠にハマられた怒りが爆発する。

俺は腕に脈打つ筋を浮かべながら右拳を固く握り締め、全身の体重を乗せて侑真の綺麗な頬へ叩きつけようとした。

元総長として、修羅場なら幾度となく潜り抜けてきた。相手がどんなにデカかろうと、街のゴロツキ程度ならこの一撃で顎を砕き、沈める絶対の自信があった。

——だが。

ガシッ！

「な……っ！？」

空気を切り裂いた俺の拳は、侑真の白く長い指によって、まるで吸い付けられるようにあっさりと受け止められた。

驚愕で目を見開く暇すらなかった。

侑真は俺の手首を強い力で握り返すと、そのまま反時計回りに容赦なく捻り上げた。

「ぐっ……、あぁっ！？」

関節の悲鳴とともに体勢が崩れ、そのまま力任せに壁へと叩きつけられる。

背中にガツンと鈍い衝撃が走り、肺の中の空気が強制的に吐き出された。視界がグラリと揺れる。

作業着の胸元がはだけ、中に着ていた黒タンクトップと、そこに刻まれた肩から胸にかけての龍のタトゥーが露わになった。

「がハっ……！ 放せ、この……っ！」

「無駄だよ、陸。君をこうやって力ずくでねじ伏せるために、この六年間、一日も欠かさずジムに通って格闘技を身体に叩き込んだんだから」

逃げようと足掻くが、両肩を壁に押し付けられ、身動き一つ取れない。

近い。顔がすぐ目の前にある。

一見すれば、細身の綺麗な男にしか見えない。だが、俺を押さえ込む腕には、見た目からは想像もつかないほどの力がこもっていた。長身の影にすっぽりと覆われ、身動きひとつ取れない。

力比べで、俺は完全に負けている。耳元でピアスが揺れ、冷や汗が背中を伝った。

「お前……なんなんだよ……！ なんで昔の俺を知ってんだ！ てめえ、誰なんだよ！」

「傷つくなあ。本当に……僕のことを忘れてしまったのかい？」

侑真は切なさそうに眉をひそめると、顔を寄せ、耳元にその薄い唇を押し当ててきた。熱く湿った吐息が耳朶を撫で、ねっとりとした重い声が鼓膜を揺らす。

「『死ぬくらいなら、俺の舎弟になれ』……そう言っ、屋上の縁に立っていた僕の襟首を掴み、力ずくで引きずり戻してくれたのは……君じゃないか」

「……あ……？」

雷に打たれたような衝撃が脳を駆け抜けた。

頭の奥底で、固く閉ざされていた記憶の扉が開いていく。

六年前。俺が『黒蛇』の総長として尖り散らかしていた頃。

土砂降りの雨が降る夕方、人気のない校舎の屋上。

そこにいたのは、暗くて冴えない、痩せこけたモヤシ野郎だった。

学校で日常的にいじめられていたのだろう。

青白い顔にも、服からのぞく細い身体にも、殴られた痣がいくつも浮かんでいる。

その日も散々痛めつけられたのだろう。破れた服を雨に張りつかせ、ずぶ濡れのまま屋上の縁に立っていた。

青白い顔でガタガタと震え、泣きながら「もう死にたい」と呟いていた、あのアホ面――。

「……あの時の……あの陰キャのモヤシ野郎か……!？」

「正解だよ、陸。……僕の『神様』」

侑真は恍惚と目を細め、俺の冷え切った頬を白い指の腹で撫で上げた。

「あの日から、僕の人生のすべては君のものだ。君に救われた命で、君に相応しい男になるために猛勉強して、いい会社に入って、金を稼いで……。君のすべてを、一秒たりとも逃さず見守ってきた」

侑真が空いた手で、リビングの高級チェストの棚を乱暴に引き開ける。

そこに並んでいたのは、背表紙に日付が印字された膨大な量の厚いファイルだった。

爪を立てて引き抜かれたファイルから、バサバサと床へ落ちる大量の紙片。

それらはすべて、写真だった。

ガソリンスタンドの制服を着て汗を拭いている姿。路地裏で煙草を吸っている横顔。アパー

トの部屋で無防備に上半身を裸にして着替えている瞬間。挙句の果てには、ベッドで泥のように眠っている顔写真まで――。

「な……なんだよこれ……！ 気味が悪いんだよ！ お前、狂ってやがる！」

鳥肌が全身に吹き出した。

俺が当たり前に送っていた日常の裏側で、この男はずっと影から俺を見つめ、レンズを向け、記録し続けていたのだ。整った顔の裏に潜む底知れない情念に、背筋が凍りつく。

「狂わせたのは君だよ、陸。……さあ、数年分の僕の愛を、全部受け取ってくれ」

「ふざけ——んぐ、む！？？！？」

叫び散らそうとした俺の唇は、侑真の唇によって力任せに塞がれた。

「んっ……！ ふ、ざけるな……放つ、んんう！」

壁に押し付けられたまま、暴れる口内を力任せに割り開かれる。

押し返そうと両手を侑真の胸に当てるが、仕立ての良い漆黒のスーツの下に潜む強靱な筋肉は、まるで冷たい岩のようにピクリとも動かない。

しなやかな体軀に見えて、その実、ジムで鍛え上げられた筋力は、俺の想像を遥かに超えていた。

抵抗するほど右手首の締め付けが強まり、皮膚に激痛が走る。

「んむ……っ、んあ……っ！」

強引にねじ込まれた舌が、粘膜をねつとりと舐め回す。

舌を絡め取られ、奥へ奥へと突き上げられるたび、頭の中の酸素が奪われて視界が白く明滅した。

ズルリ、と口端から溢れた唾液が顎を伝い、首筋へと滴り落ちていく。

こんな下品な音を立てて、かつて俺が助けた「陰キャのモヤシ野郎」に口づけられているという現実には、屈辱で頭がどうにかなりそうだった。

ようやく唇が離れた瞬間、俺はグレーの鋭い目で侑真を睨みつけた。

乱れた呼吸を整えようと、無意識に下唇を噛み、吐き捨てる。

「ハあ、ふっ……！ てめえ、何考えて……っ！」

「はは……昔と変わらないね。陸は焦ると、下唇を噛む癖があるだろう？」

侑真は目を細め、俺の心理を見透かしたように笑った。

「な……にを……」

「言ったはずだよ。君の癖も、仕草も、好きなチンコの扱きかたも、全部知っているって。僕がどれだけ君を研究したと思っているんだい？」

侑真は、次の瞬間、俺の手首を掴んだまま軽々と持ち上げた。

「うわっ……！！？ 放せっ！」

足が宙に浮く。奴は荷物でも運ぶように軽々と俺を抱え上げると、奥の暗がりにあるキングサイズのベッドへ投げ落とした。

フワッ、と体が沈み込み、跳ね返る。

体勢を整えて起き上がりとした瞬間には、すでに侑真の長身と、しなやかだが重く硬い身体が上から覆いかぶさっていた。

鍛えられた肉体の質量が、俺の全身の自由を奪う。

「やめろ……ッ！ 侑真、目を覚ませ！ 俺は男だぞ！ 元総長の俺にこんな真似して、タダで済むと思ってるのか！」

怒声で牽制しようとする俺を、侑真は心底愛おしそうに、けれど底なしの執着を込めた瞳で見下ろした。

「『元総長』か……ふふ、格好いいね。威勢がいい陸も大好きだよ」

どこまでも話が噛み合わない。

狂気に満ちた、妖艶な笑みを浮かべたまま、侑真の白く綺麗な手が、俺のガソリンスタンドの作業着へと伸びる。

「あっ……!!? やめ……!!」

作業着の胸元を乱暴に押し開かれ、下に着ていた黒いタンクトップが露わになる。

次の瞬間、侑真の指がその襟元に食い込んだ。ビリッと鋭い音が響き、黒い布地が胸元まで一気に引き裂かれる。

露わになった肌を、室内の冷気がひやりと撫でた。

「ここ、弱いよね」

「ひっ……!!?」

侑真の長い指先が、自分でしか弄ったことのない突起を、爪の先でピンと弾いた。

「あぐ……ッ!?!」

脳天を叩かれたような激しい痺れが全身を駆け抜け、思わず背中が弓なりに跳ね上がる。自分でも出したことのないような情けない声が喉から漏れ出た。

「な、なんで……」

「知っているよ。君は自分でオナニーする時、乳首も一緒に弄る姿を見てきたからね」

「な……っ！」

侑真はそう言って低く笑うと、俺の胸に顔をうずめ、突起を口に含んだ。

熱い舌先でカリカリと硬くなった先端を焦らすように転がし、デュウデュウと卑猥な音を立てて強力に吸い上げてくる。同時に、空いた左手が反対側の突起をとらえ、指の腹で擦り上げた。

「あぐっ……！ んあああっ！？♡♡」

声が裏返り、悲鳴に変わる。

自由な両手を必死に動かし、胸元に深く埋もれた侑真の頭を力任せに押しつけようとした。さらには分厚い肩に手をかけ、全身の力を込めて引きはがそうと突っぱねる。

だが、侑真の肉体は岩のようにビクともしない。強靱な筋肉を前に、俺の抗いなど何の意味もなさなかった。

どれほど必死に押し返そうとしても、侑真はびくともせず、俺の胸を貪り続けている。

昔は俺よりずっと背が低く、怯えながらこちらを見上げていたあの「モヤシ野郎」が。
今や俺を押さえつけ、指先ひとつ、舌先ひとつでいいように翻弄している。

力の逆転という圧倒的な現実と屈辱に、身体が悔しさと快感でガタガタと震えた。